



これからのライブラリアン

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-08-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 南山, 和男 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/10945

これからのライブラリアン

南山 和男*

1. はじめに

景気が低迷する中、多くの企業は生き残りをかけてリストラクチャリングを敢行しており、その一環として、退職勧奨、新規採用中止、アウトソーシングなどによる人員削減が行われている。専門図書館協議会が行った1998年の調査によると、57%の図書館が予算削減、25%が人員削減をしいられている。¹⁾ 時が経過した99年においては、更にその割合が高まっていることであろう。また、このような傾向は、図書館の種類を問わず同様と推測される。

この厳しい環境の中で、組織はより質の高い人材を求めている。つまり、個々人の仕事への姿勢、能力開発の努力などが今まで以上に問われている。また、インターネットの普及を始めとする情報環境が激変する中で、情報を仲介するライブラリアンも変化への挑戦を期待されている。

このような状況において、ライブラリアンとして価値ある仕事を遂行し、やり甲斐を感じ、充実した人生をおくるためにはどうしたらよいただろうか。企業の専門図書館における30余年の勤務を経て、定年を前に大学教員へ転じた経験などをふまえ、能力開発を中心にライブラリアンのあり方について考察する。

2. 情報サービスのプロとしての自覚

どんな仕事にもプロの領域がある。また、プロでないと社会からなかなか認められない。プロとしてのライブラリアンについて、いくつかの側面から考えてみる。

2.1 ライブラリアンという稼業

ライブラリアンは組織に雇われて給料をもらっている。もし「所詮雇われの身」という考えで仕事をしているのであれば、そこに生き甲斐を感じることは難しいであろう。松下電器産業の創業者松下幸之助は、社員に対して次のようなことを訴えていた。「サラリーマンであっても、“自分は社員稼業という一つの独立経営者である”という信念を持って仕事をする”ことである。言い換えれば、独立経営者が10人あるいは100人、千人と集まって、一つの会社をつくり事業をしていると考える。そうすることにより張り合いも出てきて、面白味も加わってくる」。これを松下幸之助はサラリーマン稼業と言っていた。²⁾

この考えは、ライブラリアンにとっても当てはまると思う。私はそれを「ライブラリアン稼業」と言いたい。担当する仕事の経営者は自分。自分の仕事は自分の責任において充実・発展させるという気概が必要である。今行っている仕事は稼げる内容のものであるのか、自分はプロとして独り立ちできる力があるのか、など考えなければならない。

以前勤めていた会社の情報部門では、社員に提供する情報サービスは有料としていた。自分の企画担当する情報サービスの価値は、お客様である社員の利用金額で表される。常に採算が採れ

* 関西外国語大学 外国語学部

るサービスになっているか、売り上げ（利用）は昨年より伸びたかなどが問われた。実際にサービスが有料になっていない場合でも、常に金額換算し、原価や採算を念頭におくことは大切である。その結果として自分の給料分は自分で稼いでいるという自負も生まれる。

ライブラリアンは、情報サービス会社の経営者、社長という意識、つまりライブラリアンという稼業を持っているという意識で仕事をすれば、そこにやり甲斐や、生き甲斐が生まれてくる。ライブラリアン稼業という意識の有無が、その人の生き方を左右するのではないだろうか。

2.2 顧客密着サービスに徹する

最近、お客さまサービスの代表格であるデパートが経営不振におちいつている。原因は景気の低迷もあるが、老舗の看板に頼るあまり、お客様のニーズを十分把握してこなかったところにも原因があると思う。

ライブラリーもサービス業、お客様あつての商売である。個々の情報サービスを企画する場合、サービスの対象は誰なのか、どのようなバックグラウンドを持った層なのかなど、いわゆるマーケットセグメンテーションができており、彼らの顔が目に浮かぶ企画でなくてはならない。また、サービス業という発想であれば、「情報を提供してやっている」、「本を貸してやっている」という考えから、「情報を利用していただいている」「本を借りていただいている」という考えに変化し、お客様である利用者に対して、「ありがとうございました」という言葉が自然に出てくるのではないだろうか。とにかくお客様に感謝し、お客様を喜ばす気持ちが大切である。

2.3 流行の下部になるな

流行している最新の情報技術を導入しさえすれば、多くの問題が解決し、ばら色の未来が拓かれると錯覚している方もみられる。新しい情報技術を取り入れようという姿勢は大切であるが、たとえばインターネットや、データベースにしてもあくまでも情報収集の一つの手段に過ぎず、問題は、そこからどのような情報を抽出し活用するかであることを忘れてはならない。世間が騒ぐから新しい情報技術を導入するという安易な考えではなく、印刷物を含む豊富な情報源を核に、新たに展開・充実したい情報サービスを考え、それを支える方法として新しい情報技術を、専門家としての見識をもって吟味し導入しなければならない。

2.4 仕事にもランク

企業においては、給料の内訳は勤務年数に連動した部分の割合が減少する傾向にある。以前勤務していた会社では、あらゆる職種について、業務の難易度、自立性、他動性などをもとに、仕事のランクが分かれており、給与の基本部分はその仕事ランクに連動する仕事別賃金を採用していた。したがって、ランクの高い仕事をしていると認定されてはじめて、給料も1ランク上がることになる。

司書という資格を持って仕事をされている方の中には、遂行できる仕事のレベルにかなりの差がある。それを仮に上級司書、中級司書、初級司書と分けるなら、あなたはどこに当てはまるであろうか。少なくとも、上級司書へ向かって努力することが期待される。そして、それが給与に連動するのであれば理想であろう。

2.5 存在価値の実感

最近、中村天風という人物の言葉をまとめた、人生や経営に関する本が書店にならんでいる。この中村天風（本名三郎）は、日露戦争での特殊勤務をへて会社の役員として活躍。しかし 30 歳の時死の宣告に等しい急性粟粒結核にかかり、治療してくれる医者を探して海外を転々とするが、治る希望もないまま帰国を決意。途中、カイロで会ったヨーガ聖者カリアッパに誘われるまま、インド奥地カンチュンジュンガへ行きヨーガを修行。不治の病から脱却し、健康体となって帰国。銀行の頭取などの要職を多く持つ。しかし、43 歳の時突然すべての職を辞して、道路に立っての講話を開始。「人間とはなにか…」などの話で原敬首相も耳を傾けるなど、多くの要人の心を引き付けた。インドの奥地で彼の病が一向に治らず困っていた時、聖者カリアッパは「人間は何のために生まれてきたのか」と彼に問うた。カリアッパの答えは「全宇宙の進化と向上に役立つため」、つまり世の中に役立つ人間であらねばならないということであった。これに気づいた彼は、それ以降すっかり自分自身の病を気にしなくなり、気がついたら病は全治していた。³⁾

このエピソードに、仕事や人生のあり方のすべてが語られているように思える。天風哲学が指摘していることは、世のため人のために役立ってこそ、人間は本当の幸福を手に入れることができる、ということである。松下電器を世界的な企業に成長させた松下幸之助の発想の根底には、「みんなが幸せになれば自分も幸せになる。自分が幸せになれば、必ずみんなも幸せになる」という思いがあると言われている。これも同じような考えであろう。たしかに、自分が何かの役に立っていると実感できることは幸福である。会社の情報部門で情報サービスの仕事を担当していた時、利用者の喜ぶ姿が何よりの励みであった。人の喜びが吾が心の喜びとなっていたように思える。中村天風や松下幸之助の言葉が理解できるような気がする。

ライブラリーの仕事は、他人のための仕事である。しかしその仕事を通して、利用者の喜びを自分の喜びとして心に刻めれば、自分の存在価値を実感でき、これほどすばらしい仕事はないと思う。特にレファレンスの仕事は代表格といえる。したがって、そう思えるかどうか、ライブラリアンとしての生き甲斐を見つけられるどうかの分かれ目になるのかも知れない。当然、役に立つ仕事ができる能力を身につけていることが前提である。

2.6 究極は情報ソムリエ

ライブラリアンの仕事の究極の目的は、ニーズに合った的確な情報を、いかに早く、安く入手し提供するかであると思う。その達成度は、能力や知恵次第といえる。情報のことは何でも分かっている、彼に聞けばどんなことでも解決の糸口を教えてくれるという情報の達人を、私はワインの達人ソムリエの称号を借り「情報ソムリエ」と呼びたい。ライブラリアンが、この情報ソムリエへの道を天職と思えるようになることを期待する。

3. 能力開発のすすめ

松下幸之助は「もし自分が社長であったら、果たして自分を雇うであろうか、どの程度の給料を払うだろうか、どれだけの仕事をやらせるだろうか」と自分に問いなさいと言っている。⁴⁾ 人の役に立つ仕事をして、生きがいを感じ、さらに給料をもらうには、それを可能にするレベルまで自分の能力を高めなくてはならない。そして、そのような能力開発の努力が、自分の未来を拓くきっかけとなる。

3.1 未来を拓く三角形

福井大学名誉教授山崎正博士は、健康に関する講演の中で、健康強化の三角形として、体操などによる免疫系強化、食事法による内分泌系強化、瞑想法などによる神経系強化の三要素が重要であると話された。⁵⁾ このお話を聞きながら、自分の未来へ向けての努力の方法にも、同様の考えが当てはまるのではないかと考えた。すなわち、第一は健康増進の努力が基本であろう。第二は食事ならぬ勉強による能力開発、第三は外に張られた神経系としてのヒューマンネットワークの形成、この三つがバランス良く膨らむことにより、自分の未来が見えてくるように思える。能力開発は自分自身の力となり、ヒューマンネットワークは困った時に助言してくれる助け船である。ただし、ヒューマンネットワークは、能力開発によって得た自分の知恵を他人に提供することから形成が始まるのであって、決して作ろうとして作れるものではないことを心得ておくべきである。

3.2 三足のわらじを準備

自分の将来の方向は常に三つくらい考えておきたいものである。もし、一つだけしか考えていなかったとしたら、その道が行き詰まり断念せざるをえなくなった時、失意と悩みは大きなものとなり、またゼロからのスタートになってしまう。三つの道筋を考え、それぞれの道に向かって努力・準備しておれば、一つくらい断念しても、大きな動揺はないであろう。

作家塩野七生氏も、協和発酵主催の「朝日ヤングセッション」における、若人を対象とした21世紀を迎える心構えについての講演において、「一つの選択肢では通用しない。多くの選択肢を持ちなさい。その中のどれかの方向にきめるには情報が重要である。常に情報を集める三本の磁石を立ておれば情報が集まってくる」という趣旨のことをお話されている。⁶⁾ 人生について常に三つくらいの問題意識をもって生きよということである。

どのような三本の柱を考えるかは自由であるが、小生の場合、会社勤務時代、一つは仕事の夢、二つ目は会社での経験を生かした別の職業、三つ目として趣味・道楽を通しての社会への参加、を考え多少の準備をしてきた。そして縁あって、二番目の道である大学教員へと進むことができた。時とともに柱の内容が変わることがあっても、常に三本くらいの将来方向を考え努力しておれば、機会が訪れた時、それを未来を拓くチャンスとしてつかむことができるのではないだろうか。

3.3 自己投資

一昔前の企業においては、職場の上司や先輩がきめこまかく親切に教育してくれた。しかし、リストラが進む中、自分の生き残りがかかっており、他人の面倒を十分見る余裕などなくなりつつある。また、経費削減のため、社員の研修会参加費用も削られることもある。能力開発のチャンスが他から与えられる機会は少なくなった。

このような状況の中で、会社は十分な教育をしてくれない、社外の研修会にもあまり出させてもらえないと文句を言っても始まらない。能力開発を怠って損をするのは自分である。他人に頼ることなく、自分の責任において自分の能力開発を行わなければならない。会社から費用が出ないのなら、休暇をとり私費で社外の研修会に参加するくらいの積極性が必要である。自分の能力開発のために、自分の時間と金をあまり惜しまず投資すれば、将来きっと有効に活きる。

4. 注目したいテーマ

インターネットに代表されるように情報環境が急速に変化しており、多様なテーマに注意を払い勉強しなければならないが、特に関心を寄せておきたい事柄を提示したい。

4.1 情報リテラシー教育

パソコンやインターネットの急速な普及にともない、情報リテラシーを身につけることが必要だと一般によく言われる。しかし、言っている内容はパソコンの利用法が中心であり、いわゆる「コンピュータ・リテラシー」と言われるものである。コンピュータやインターネットは、多様な方法が存在する情報収集・処理法の一つの手段にすぎない。一方、情報リテラシーとは、知的作業のために情報を収集し活用する能力、すなわち「情報活用能力」である。コンピュータ・リテラシーはその一部分を構成するものである。

米国では低学年のうちから図書館利用の訓練が行われると聞く。そして現在、その経験をベースに、情報活用能力のレベルアップを目的に、インターネットの活用へと政府も社会も動いているのではないだろうか。日本の学校の場合、図書館で情報を調査するといった教育が十分であるとは思えない。情報の価値や、著作権などの法的規制などの理解なしに、データの大海原であるインターネットの世界へいきなり入ることは危険でさえある。情報リテラシーは、学生の勉学や社会人としての問題解決行動などにおいて役に立つ、基本的で非常に重要な能力である。この情報リテラシー教育においては、ライブラリアンの役割は大きい。例えば、大学においてこのカリキュラムを組むのであれば、演習はライブラリアンの協力なしには効果を上げることはむずかしい。今後ライブラリアンは積極的にこのプログラムに参画すべきではないだろうか。

大学でのカリキュラムの例を紹介する。関西外国語大学では、1998年4月より、全学共通科目である「総合科目」(通年)として小生が開講している。内容は、情報管理の基礎、情報源、データベース、インターネット、知的所有権、ファイリング、レポートのまとめ方などで、情報の扱い方全般を含めている。受講者のおよその人数は98年が650人、99年が900人である。京都大学では、長尾総長の提案により、情報活用能力が大学での研究や勉学の前提となると考え、1998年度より全学共通科目「情報探索入門」(半年)を開講した。内容は、図書館の利用法、情報の所在を知る方法、データベース、インターネット、論文を書く手立てなどで、図書館の職員が協力し、講義と演習をセットにして学習効果をあげている。⁷⁾

このような取り組みが、各大学で行われれば、学生は情報活用能力を身につけ社会に巣立つことになる。ライブラリアンと教員のタイアップを期待したい。

4.2 電子図書館の取り組み

電子図書館の取り組みは、奈良先端科学技術大学院大学をはじめとして多くの大学で始まっている。しかし本格的な電子図書館への道のりは、著作権問題などの大きな課題があり大変厳しい。電子図書館を看板としている国立国会図書館関西館の2002年開館を機に、これらの問題が大きく前進することを期待する。

これから出現するであろう電子図書館を大いに利用させていただくことは、当然念頭におくべきと思うが、自分が所属する図書館も、電子的情報媒体の積極的な導入や、それらを従来の印刷媒体と統合的・有機的に活用するしくみの構築など、電子図書館の発想で取り組むことが必要

である。

4.3 インターネット情報の組織化

インターネット上には、従来のレファレンス・ツールや一次情報源も含め、想像を超える種類と量の情報が提供されていることは説明するまでもない。情報収集に有効なサイトは沢山あるが、自館のお客様の多様な情報ニーズに対して、いざという時スムーズにたどれるであろうか。Yahooのような総合的なポータルサイトだけでは、お客様は満足しない。インターネット業界では、専門分野に特化したポータルサイトを提供するところも今後増えるであろう。しかし、自館のお客様のニーズに合った専門的なポータルサイトは、ライブラリアン自らが作成しなければならない。単に他のサイトにリンクするだけでなく、できれば検索手法まで踏み込んだ仕組みをつくりたいものである。

便利なポータルサイトが準備できたとしても、お客様を端末の前に座らせておくだけでは解決しないであろう。積極的に相談に乗ってあげなければならない。その担当者には、当然インターネット情報源についての幅広く深い知識が要求される。この仕事はそれなりに専門性があるのではないだろうか。このような新しい職種を、インターネット・インフォメーション・サーチャー（IIS）とでも言いたい。しかし、インターネットも情報収集の一手段と考えるなら、レファレンス担当者の保有すべき能力の一部とも言える。

インターネットの普及とともに、図書館不要論などが話題になったりしているが、我々にとって有用な情報の多くは、まだまだデジタル情報になっていない。蔵書構成などは修正していかなければならないが、基本的には図書館の存在は否定することはできない。むしろ、ネットワークとパソコンで構成される無味乾燥の世界では得られない、紙の感触や、人間味ある環境のありがたさを再発見することになるのではないだろうか。ライブラリアンはその期待を裏切ることのないよう、情報環境の変化に即応した高い能力を身につけ、より多様化、高度化するお客様のニーズを満たしてあげなければならない。

5. おわりに

図書館の仕事の多くは地味であり、「縁の下の力持ち」の部分があるために、ややもするとライブラリアンは志気があまりあがらなかつたりする場合がある。そんな時、とかく自分の不運を嘆き、原因を他に転嫁してしまいがちになる。しかしそのような考えの中からは、自分の明るい未来はなかなか見えてこない。

ヒューレット・パカード社コーポレート・ライブラリー・マネジャーのユージニ・プライム女史は第88回米国専門図書館協会年次大会における特別講演の中で、ライブラリアンに次のようなことを訴えている。「悪いのは運命の星ではない。私たち自身である。自分自身の運命は自分で切り開け。自分の現在の力を認識せよ。あらゆる可能性があることを信じて努力することを決意せよ」と。この講演は3000人の聴衆を魅了したと伝えられている。⁸⁾

ライブラリアンというすばらしい仕事の未来は、個々のライブラリアン自身の真剣な努力なくしては訪れないということではないだろうか。

参考文献

- 1) 専門図書館協議会. 経済不況下における専門図書館運営アンケート調査結果報告. 専門図書館. No.170,P.11-13(1998)
- 2) PHP 研究所編. 松下幸之助「一日一話」. 京都, PHP 研究所, 1981, P.145.
- 3) 岬龍一郎. 中村天風 銀の言葉. 東京, KK ベストセラーズ, 1995, P.99-104.
- 4) いま松下幸之助に学ぶ. P H P. No.616,P.94(1999)
- 5) 山崎丈右衛門. 生活ヨーガの実際. ヨーガ禅道友. No.47,P.12-23(1999)
- 6) 協和発酵広報部編. 塩野七生講演会「21世紀にどう入っていくか」. 東京, 協和発酵(株), 1998, P.45-52.
- 7) 長尾真監修. 大学生と「情報の活用」情報探索入門. 京都, 京都大学図書館情報学研究会, 1999,140P.
- 8) 豊田恭子. 立ち上がれライブラリアン!米国 SLA 大会におけるユージニ・プライム女史の講演. 情報の科学と技術. Vol.48,No.9,P.500-505(1998)
注: Eugenie Prime. The Fault, Dear Brutus. 88thSLA Annual Conference in June 1997
の講演要旨